

岡田 甫校訂

誹風 柳多留全集 九

自一一三篇 至別篇・上

三省堂刊



誹風 柳多留全集 九

定価 五八〇〇円

昭和五十三年三月十五日 第一刷 印刷
昭和五十三年四月一日 第一刷 発行

校訂者 岡田 甫（おかだ・はじめ）

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

発行所 株式会社 三省堂

〒一〇一東京都千代田区神田神保町一の一
電話 東京（〇三）二九三―三四四一（代）
振替口座 東京六一五四三〇〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

誹風柳多留全集九

目次

誹風柳多留

百十三篇	一
百十四篇	三
百十五篇	四
百十六篇	充
百十七篇	五
百十八篇	一三
百十九篇	一七

百二十篇	一六
百二十一篇	一八
百二十一篇(乙)	二〇
百二十一篇(丙)	二七
百二十二篇(別)	二五
百二十三篇(別)	二七
百二十四篇(別)	二八
別篇・上	三一

柳
多
留
百
十
三
篇

天保二卯年刊

天保二更々新板 柳樽百拾三編

……【一三・扉】＊

(空白)

子十二月廿日
武蔵野納會 麴丸評

催主
風松

彦の顔ゑとる壽の字の余り筆

親子目出度人別の座替なり

さがなき口にはころびる袴腰

稚子の瘦ハ母親酢を好ミ

主の縁ぬけても切れぬ劔抜キ

からんた文字を解わける蟹の糸

瘦て常世ハ武士の骨をみせ

時かわるいと干からひる蕨のり

……【一三・一】

玉の緒を巻とも知らぬ繰曆

かしましと拾たもあるに鉢扣(鉢)

龍燈の松にも苔の鱗がた

佛ハ年増盛りに讀で(四九)△(八九)んた哥

斷琴の友ハ二ツに城と一

寒習ひ氷に乗た訴人する

姑女へ世話狂言ハ孝な娘

鉄槌か出てかぎさきの仇を打

末世まで世に名をふらす雨の哥

野萩

古京

よしほ

風松

三輔

祖山

全

よしほ

松丸

千之

金成

未青
(安四・智五)
(四九・五・柳雨)
(八九・一・龜弟)

布山

濱人

文袋

今人

早牛

夏喰れ冬くわせたも同じ孝

合セ鏡ミて熨餅フヒの似貞焼

餌ヱ堀ホハ見かぎつて行通り町

犬か來てさわけハ桶もぶつこわし

琵琶の音を蹄てならす左馬之助

御一言あつき菜とりの彦左エ門

六朝に仕へて腰に弓を張り

柄のすげよふで名の違ふ鋤と鍬

麥のふとりで畔道かやせて見え

……【一三・二】

味噌汁て腹直しする古きせる

おとろへハ檜扇の手に杖を突

氣の利レイハたタ肴山椒も目から鼻

紅粉隈に夫婦しばらく遠ざかり

イサ水買はん山吹をほうじさせ

空解のレをせぬのハ繻子のレも年に恥チナ

むしつを洗ふ角盥はたゝ神

竹束柵茂木かまへてる材木屋

足袋屋の看板手を下けて足を上ッ

吳竹

鳥水

扇松

鳥水

連茂

春風

連茂

花山

風松

松丸

叶

魚交

一秀

二豊

連茂（七・三）

叶

錦成

木卯

桐柄杓永く勤て重くなり

蓮の根の糸に薄刃も琴に斧

黍明て横穴を見る鍋いかけ

藥鐘の蓋にほうろくの置頭巾

千早振神子もふだんハ山の神

三面の像を秋葉て猿拾ひ

孝行の袖ハ石碑へ濡残り

光次の曾孫十六で世をつがせ

直くならぬ道で丸橋ふみはづし

……【一三・三】

杳ほどに見える土橋の流れ鴨

能キ景色雪に鳥居も首ツ丈

待合でどらを打てる茶な隠居

せんたくの盥も和哥のうつは物

泥水にはまり親父に洗らはれる

割海老ハ仁王の見えで網戸棚

瓢たんで針を買て行鯰釣り

ねずの番猫も女三の宮仕へ

清書て張れて三毛の猫火鉢

魚交

春喜

一路

仲住

冬壽

錦糸

古京

冬壽

貞龜

風松

亦樂

魚交

亦樂

流螢

芋洗

文呂

千之

土筆

夕紅葉下戸ハくしやみをして歸り
古本屋見世にたゞよう藻塩草

唐人ハ日本堤でぼつかへし

さつまといふおつむりの角大師

草摺を風におさへる女武者

歩行なからたれてく馬士のひり咄

生死分明ならざるハ酔貝也

古池ハ飛込柳飛上り

一ト時雨降り止めてゐる神道者

.....【二三・四】

狐火ハ恩にとほされ義理にきえ

今夜も壹人リ正面に茶の仕掛

風の住居造作を下女が繼キ

もゝんちい出見世の方ハ股斗り

せりやつた馬屎たきうのように取

役者附築地あたりハ場末也

韓信にむね気なやつが屁をかゞせ

うばに仕立て乳の出る安布子

輕子が寄てぼうだらをかつき上

調

帆布

よしほ

千之

左棟

貞龜

よしほ

夢輔

全

和國

よしほ

錦糸

三朝

水鳥

三箱

桺舛

野萩

流螢

ふつくりと疊に無利な敷合せ

人をハおろし我事ハ棚へ上ケ

日の出の風にわんばくの^(雄)手力短

顔見世がきまつて跡がぬれの幕

和哥の盗人たらひでも尿をたれ

関寺の頃ハしきを身にまとひ

ぬれ事ハ雨乞でさへことわりや

茶でさへもちゞれた方が味シがよし

^{大尾}前髪をしやんととつてる驚の首

.....【二三・五】

茂ル 評

元和このかた吹通す時津風

着て歸る恥ハ古郷へ苔衣

國家老鳥有里にして歸り

唐門の眼かけも國を失なわせ

捨鐘か其夜の親の乳に響キ

小茶菜か枯れて眞赤に皆しほれ

年の暮松の魚にも笹を入

息キの音の調子も狂ふ野田の城

龜山

定丸

株木

素丸

祖山

魚交

風松

雪下

虎丸

株木

三輔

山吹

メ丸

夢輔

風松

梅鳥

メ丸

分銅か六ツ目かたの有る女郎

煤拂の姥捨山に置巨燵

今夜も一人リ正面に茶の仕掛

桑の木と楓和漢の堅木也

肴の王も櫻鯛ぼたん鱈

小姑の琴垣(註)と不和な名古屋打

目出度サハ嫩に出口の柳樽

朝飯の陽氣引窓の雪もきえ

初陳(マ)に解ぬ三歩(おびくもむ)の帶曲輪

……【一三・六】

虫を殺して氣で喰ふハ身の藥

何シ句でもあざりなんしは三(ウツ)のツア

チ御脊中と義朝をぶつて

信濃路の初雪霽の三里迄

庭の松宝引をして冬籠リ

不礼講おほこに臍を抱へさせ

張板に千筋嫩が琴の見え

箸紙に喰ちらかしの客ハなし

伊勢紙で口も二見の三度提

野萩

芝鶴

よしほ(4)

清尿

巨眼

梅鳥

竹成

風松

堅丸

春駒

風松

調

コタマ

定丸

鳥水

今人

祖山

蛸角力團扇を引と八ツに組

茶番の五郎八寸の詫に行キ

大森土産おぶさつた子にも遣り

鉢米を釜へぶち込どら和尚

大層
むだおえの見料を出ス大笑ヒ

錦糸評

はかなく消し蠟燭の御一言

太平の兜ハこより細工なり

鉄輪の鉤で火の出る石の井戸

……【一三・七】

何やつか句で音つれる才牛忌

かつちりと三ヶ月に寐る土瓶つる

酒中花のやうに水桶籠がはね

仲の町雪に二崩し三崩シ

清書で張られて三毛猫火鉢

立千鳥ほとに濱屋の反古團扇

南天一葉こは飯の押繪也

敷嶋の道ならぬ繪をハ公家の職

草摺を風におさへる女武者

狸汁

今人

柳舛

左棟

舛丸

よしほ

堅丸

清尿

芝鶴

早聽

花菱

清尿(二二三五、清)

土筆(3)

金成

芝鶴

蛙柳

左棟(4)

吹からの龜相ハ疵の玉紬

ふるつたり立たりお針一首讀

松明て横穴を見る鍋いかけ

玄關からおめずおくせず百旦那

能^三景色雪に鳥居も首ッ丈

瓢たんで針を買てく鯨釣^{行^三り^三}

鴈皮紙のやうに目黒の重ね餅

ほろ酔の普賢象牙へ寄懸ッ

味噌汁て腹直しする古きせる

……【一三・八】

遠目には鶯筏しの簀と雪

玉へ投ケさてにすくわす江戸同者

馬乗袴髷さしを尻へ入レ

定宿を名乗三保の谷身をのがれ

半切の繼目へ爪のかけ火のし

氣のきいた肴山椒も目から鼻

小姑の琴柱と不和な名古屋打

桐柄杓長く勤て重くなり

和らかな若菜源氏の茶碗盛

多居

末青

一路⁽³⁾

左棟^(四七・五、巾布)

亦樂⁽³⁾

文呂⁽³⁾

柳下^{八丁堀}

松丸

全⁽²⁾

芋洗

一之

花菱

堅丸

其成

魚交⁽²⁾

巨眼⁽⁶⁾

魚交⁽³⁾

一路

氣がつきて縫^二宿の手も狂ひ獅子

穂をつんたとハ思はれぬ鷹の爪

こゑるといふ手ッ付て簫の笛

茶番の五郎ハ八寸の詫に行^キ

蒲鉾屋鼻づらこする天狗鮫

一貳町有る船橋の廻し部屋

御代番古郷わすれぬ東形

ぬらつく蓴菜赤貝の妻へ入レ

頼まれて水揚帳を隠居^メ

……【一三・九】

大尾
後家の薬研て唐土を粉にはたき

梅 亀 評

供奉にまで蜻蛉の見える秋津國

綿の山見えてもぼろハ出ぬ國

政宗の御家も鉄で能くきたへ

かみなりに臍を抜れた原田甲斐

皆拂子投た達^二ハ血に染り

ぞにハ氣が付ずおんなじ事といひ

大雨しきりにふりしかハ札に餅

定丸

迎茂

花山

今人⁽²⁾

魚鱗

堅丸

鳥水

二豊

佃

迎茂

茂^ル

佃

迎茂

貫雨

麴丸

一之

十九丸

左りの手長くて嶋の守り神

毛を引てもかの次郎ハ命乞ヒ

間者説客度々用ひとらの詫

和哥の盗人もたらひて尿(も5)をたれ

てうしの海も汐が干て千鳥立

茶番の五郎八寸の詫(行キ7)に來る

吞時ハ妻目を白く黒くする

歌の論いまひとたひを讀返し

片腕の武士茨木へ退去する

……【一一三・10】

唐人ハ日本堤でぼつ歸し

こよみ出の下段黒日の焼の疵

店立を度々喰たちの闇婆借

三千の饅頭犬に一ツくれ

佐野の庵尺二の的て茶をほうじ

わい／＼ハ天王山の明智勢

神佛同躰ばた餅と御備

息子の持病方／＼へ灸をすゑ

弓手に三筋ひきたてゝヘイ是ハ

うとき

野萩

佃

祖山(5)

嘉雪

今人(7)(9)

三朝

梅鳥

萱(萱)子(九一・10、里谷)

よしほ(4)

野萩

扇松

柳舛

貞亀

風松

舛丸

三朝

伊豆市人

角の玉屋で約束の寒の紅

夕鳥程土手を行黒頭巾

上ハあごへ付て(ぐりはま)野焼(キ)が出來

新造へ犬の姥捨山が出來

名代の寐人をしかる薩广客

座敷窄范蠡の氣て屈文

いゝ宗旨酒と肴と穴かしこ

孫太郎姑の肝シの虫にきく

是ハえんぎの御宇らしい道鏡

……【一一三・11】

生死分明ならさるハ醉貝なり

愛別離苦とあきらめる所化の質

表札を小鬢へ附る安役者

五色にハニタ色足らぬ不動尊(の目四六)

西行へかける無しんのかこち顔

桐柄杓長く勤て重くなり

定宿を名乗り三保の身をのがれ(△8)(谷)

大坂の足をふんでるふといやつ

鯨の頭痛どう突て全快し

梅鳥

素丸

其成

千之

野萩

風松

柏枝

千之

木馬

よしほ(4)

千倉

帆布

飛騨鳩枝(四六・10、都柳)

竹成

魚交(3)(8)

堅丸(8)

貫雨

うとき

齋日に鬼山城も惣仕舞

はね炭に百物語り飛上り

瘡じよぐといふ遣り手も流石女にて

居續や遣り手の部屋も覗かるゝ

穴を出て山谷で育ッ狐の子

君の目の汐に乗り出メ床の海

大尾
サア事た野屎間近く手負猪

木頭評

天數ハはかれと知れぬ智の深ッ

……【一二三・12】

雀まで竹まとひする神の藪

杳音高く飛鳥井の御参内

礼服で旅の支度の神路山

其職に當リ名譽の冷巨燵

横寫の蒲團ハかけぬ冷巨燵

松を焚つもりでむだな榎の風呂

霞小紋に染むらの天の川

再會を期して北朝陳（てい）を引

伐木の瘦か身に成木端賣

よしほ

風松

左一

愼我

今人

加藤
埜琴

祖山

如雪

貞龜

飛騨高山
同 笹鱸

松鱸

十九磨

佃

小丸

春喜

柳舛

佃

踏んた雲また笠になる富士の峯

平治尾張て居續もあこぎなり

片腕にする氣針だの艾だの

草履へ正札番町の格子見世

灰吹の蛇ハ龍王の煙て出來

齋日ハ鬼山城も惣仕舞（12）

光陰の矢尻きりく巻曆

せわしなく眼鏡の沁る風ッ引

割そふな茶碗の中にひゞ藥

……【一二三・13】

せい出セハ氷る間も無キ水草

かな響ッも交ッてる鐘の施主

馬鹿な鱷や山の芋作てる

蛸角力團扇を引と八ッに組

九艘よりとんだ早業梶枕

野郎の淺妻万歳の渡し舟

湯嶋では上野のかねで飯を喰

しやほんかとおもや天狗の水ッ鼻

牛と猪つるんで豕ハ出來たよふ

春風

扇松

梅鳥

冬壽

今人（五九・26）雪下

よしほ（12）

八丁堀
麴丸

仕候

柳月

八丁堀
如雪

飛騨高山
仕候

午眠

狸汁（7）

醜郎

一路

扇風

柳舛

松丸

彦さんよしなと毛谷村をおつふさき
大尾
御臟まであつたまる埋メ巨燧

舛丸評

御仁政蜘蛛の巢懸る目安箱
五常通りを眞ッ直くに天の道
光陰の矢にも日の的月の的
峯の松脂ハ鞍弓の音に通ヒ
恩の門やみに遙拜して通り
藪に有る時ハねくらの餌差竿

……【一一三・14】

門忝ハ實に分別の一里塚
雪で名の末世に消ぬ忠と孝
口附ぬ文字へ一本の箸遣ひ
箭火の巻かき過て讀んでいる
おのか落葉を掃初る艸簪
洗濯て落る雲井の糸と歌
空色に裾野ゝ霞む秩父山
啼ヶハこそ鳥とハ知れる雪の驚
海老錠をピンと蛭子か書物箱

一之
風松

舛茂

舛

亦樂
高山
松鱸

巨眼

野萩

風松

早牛

舛茂

中住

舛茂

千之

一秀

舛

巨眼

衰へハ檜扇の手か杖を突に(2) △(2)
のう／＼と呼んで鉢の木負て遣り

日の出の身上朝起キの人を譽

沓ほどに見える土橋の流れ鴨

取り當た嫁も姑に取り當る

霜の上右ずりにする鳥の跡

待女郎素顔ハ嫩へ馳走也に(四人)

出商ひ親に反甫の鳥舩(嘘)

五味の内親父ハにがし母甘シ

……【一一三・15】

一せんめしハなめくじと蝸牛
眼鏡遠てからくりへ聲這入
針をふみ姑ハ嫩をめどにとり
一ッ宛時雨を誘ふ揚豆腐
魂を入替るとハ無利(マ)な親
短冊形リに帆の見える和哥の浦
桑名でハ嫁か焼たりいぶしたり
寒彈キの浅間口から立ッ煙リ
糸こんにやくが綻た齒へからみ

叶(2)

三輔

全

風松(3)

雪下

高山
鵲

風松(明三・信一 四八・19井蛙)

株木

一秀

一之

莖子(舊)

錦成

虎山

高山
千倉

春喜

喜朝

祖山

金成

當^アがつて嶋の蛇ハ浪次第

張りての多イ稽古所の腰障子

皮きりにつばきを附る伊吹山

玉子屋の拂親父ハ子へ隠^シ

御利生を閑所て見せる伊勢參^リ

屏風の内で弁天の貝細工^{大尾}

萱^書子評

鳳凰の御座を守護する鷹鳥

大根の御入府供鎗が千六本

……【二三・16】

梅ヶ香にはてなくと安樂寺

秋津洲を切したがへる鎗の銘

句大工の手諫^練もかな遣^ヒより

風に万葉も踏む和哥の徳

つゝしまず瓜田にくつわ虫ハ啼^キ

芳村と蚯蚓を響る虫仲間

返り字も戀路も蜘蛛が糸を引

奥山ハ猿丸堂と知^ッたふり

松かさの火に蛤の片時雨

錦糸

高麗

玉守

風松

萩仙

丸

丸齊^書

株木

小丸

山吹

芋洗

成安

木賀

茂^ル
(七三・30、加支)

風松^{高山}

松鱸

虎山

文箱の閑所を破る下女が忠

暮に賣る松ハ日本の飴り物

白魚も君と肌ふる玉子とち

古本の見世にたゞよふ藻塩草^{屋4}

いかめしき音や新身の刀鍛冶

纜に継のまとふ御赦^{ごしや}のふね

御ぞんじの紅葉も軒てつるし切

簾掛と呼千代能が月の宿

緑林の徒にハ染らぬ公治長

……【二三・17】

蜘蛛のふるまひ唐人ハ味く喰

刺通す仇空蟬のから衣

玉へ投^{ケ(8)に(8)}さでぐすくはす江戸道者

嗟峨の奥世をすね人の住所

琵琶の音を蹄てならす左馬之助^{る(13)}

馬鹿な鱧屋山の芋作て見

簪の帯て紅を姫ハはき

首からと手柄鍔を引ちきり

茶番の俊寛茶ほうじを二本持

其成^{麴町}

仕候

舛右

帆布⁽⁴⁾

全

歩月^{高山}

八重人^(二〇・3、八重人)

三輔

木賀

今人

歩月^{高山}

一之⁽⁸⁾

木賀

連茂⁽²⁾

午眼^(眠13)^{高山}

梅龜

三輔

虎丸

雪の頭痛てかんざしもまけんした

子を柵にせき留る盆の水

瀬川屋敷も千両の古券也

合セ鏡てせんへいの似貞焼

御立觸尻からさわく合羽簞

釜屋より鍋屋の多イつくま村

かたずを呑んで盆を上戸持

粥の字を破魔弓と詠まと違ヒ

だんまりの文二番目に物を言

……【一一三・18】

とつたりと来る成田屋の煤拂

養仙の日保養がしかるべし

梅干の種か茶呑の腹へ入

金柑と俊寛跡へ残される

大黒の槌ハ御寺の小夜砧

猪狩りと号し裾野の毛をむしり

つり合ぬものハ相模に松ヶ岡

おえぬ事しひんとちきるやうに成

針を踏姑ハ姫をめどにとり

佃

錦糸

茂ル

鳥水（三）

舛丸

秋鹿

定丸

花菱

夢輔

亀山

大笑

よしほ

舛右

千之

太笑

迎茂

山吹

錦成（五）

茶の時ハ花娘にちり上りなり

大尾 廣そふと豊嶋を見立御在城

巨眼評

芦の葉ハ僧栗（おし）ハ神の船

大黒を捨て夷の國をせめ

下ると當る大坂の立おやま

蕨武も夷に三とせまで足たゝず

三ツ足の膳日の形リで鳥色

峯の松脂ハ鞍弓の音にかよひ

……【一一三・19】

山伏の子がほらをふく蜜柑種

實に名歌たゝ一ト文字のちかひそや

桔梗より盛りの長（サルスベリ）イ百日紅

月の岬に近星ハ九曜なり

者（ディレバ）にをりノ上の御手が入

神輿程さわく新酒の男山

粥の字を破魔弓と讀（ヒ）の違（ヒ）

按（うづめ）ハ埋（め）てもけんひきハ越後勢

貳朱の臺鼎をあける身てはこび

迎茂

風松

亦樂

礪川

風松

扇松

竹成

高山 松鱸（14）

冬壽

祖山

木卯

貫雨

伊豆 敬十

鳥水

花菱（18）

風松（四八・フ、亦樂）

株木